

【随 筆】

サロベツ遠征を終えて

住 吉 尚

(釧路支部)

サロベツ遠征を終えて、翌日に大急ぎで先月号の原稿を書きました。私は水曜日に獣医師会釧路支部事務局に出勤することになっているので、北獣会誌の原稿は水曜日に書きます。北獣本部事務局は11月16日と17日は事務所引越して電話等がつかないと言います。それでは！と取り急ぎ2回目の遠征翌日の9日に書いたものです。事実関係は前回書いた通りですが、数日して何か書き足りなかったかなーと思い、少し書き足します。尚、サロベツでのタンチョウの捕獲と標識放鳥は昨年からやられており、昨年は4羽を、今年は5羽を捕獲し標識放鳥したものです。

さてこのプロジェクトが動き出したのは、サロベツにはタンチョウに強い思いを持つ人たちがいることが第一でしょうね。サロベツには若い活動家が出て、サロベツ湿原で繁殖しているタンチョウがどこから来て、どこに行くのか？が知りたくて、網で捕らえる方法を考えました。これは改良型無双網と言うのでしょうか。無双網に強力なゴムを張って、トリガーを引くと一気に網が広がり鳥を捕獲するという装置です。私はこの装置を見るのは初めてでした。もう何十年前前に網をロケットで広げるロケットネットのデモンストレーションを見たことがありますが、簡単に素早く作動する今回の装置は大変優れていると思いました。秋になってデントコーンの刈り取り後にいつもタンチョウが飛来する場所がある。そこでのタンチョウの捕獲作業をしても良いと畑の持ち主が許可してくれる。そしてこの計画を環境省が許可する。などの問題をクリアーして初めて動き出せるプロジェクトです。このため、前段の捕獲までの部分は現地スタッフが、タンチョウが網にかかってからは釧路のタンチョウ保護研究グループが担うことで、環境省の許可を取り付けたのでしょう。昨年は釧路から1名が出動したのですが、今年は発信器が3台あるので、3羽連れの家族がターゲットです。昨年は3羽連れの家族を捕獲し、雄の親鳥にだけ発信器を付けたところ、雌と子供が発信器を付けた雄と別行動をとることとなり、雄は鶴居に来たのですが、雌と子供はどこに行ったのか未だに不明のまま

です。そこで家族3羽を捕獲したときは親鳥2羽に発信器を付けよう、と言うことになったようです。こうなると捕獲経験者が1名だけだと当然ながら不安ですよ。釧路には動物園、ツル公園、タンチョウ保護センターがありますから捕獲経験者は何人もいます。でも来週2泊でとか、急に3泊に変更でとか、言われても行けそうな人は私しかいないでしょうね。しかもまともな宿泊施設ではない所での宿泊ですからね。ともあれタンチョウを餌付けし、トラップを仕掛けて、毎日トラップの前に飛来するよう仕向けるといって、最も大変な作業は向こうがやり、我々はタンチョウが網に絡まった後、走って行って、網から外し、足輪を付け採血をして、発信器を取り付け、放鳥すると言った所を受け持つのが担当です。偉そうに釧路から出向きましたが、向こうは何週間もの事前準備があったのでしょうが、我々はせいぜい1時間半ぐらいの作業で終了です。でも単に網に絡まったタンチョウを網から外し、足輪を付け、採血をし、発信器も背負わせて、放鳥するというまでに、人も鳥も安全に保定をすると言う、これまた単純な作業ですが、やはり経験がないと「簡単」とはなりません。足輪を付けるには、鳥を保定帯でくるんだまま足を延ばして右足に取り付けます。採血は私がやるので翼からの採血となりますから、鳥をおおむけに寝かせて、ひとりが鳥とは反対の方を向いて鳥の頭がお尻の方に出るようにして、鳥の上半身にまたがり、片手でどちらかの翼を広げます。成鳥の場合はもうひとりに足を保定してもらいながら、採血をしています。誰にどんな格好で保定してもらうのが良いかを指示できる必要がありますよね。更に発信器を取り付けるには立位での保定が必要です。ひとりが頭を抑え、もうひとりが両翼を羽根が広がらないように持って、立たせると言うことなのですが、少しコツがいります。こうして立たせたまま、もうひとりが発信器をランドセルを背負わせるようにして取り付けます。私は採血と立位で立たせるように保定する役目で、これはタンチョウの取り扱いに慣れた人でないと難しいかもしれません。こうして、今年は10月24日に2羽、25日に1羽を、そして11月7日には2羽を捕獲しました。10月24日に捕獲した2羽の内の1羽は、昨年は単独個体で昨年の11月28日に捕獲され、429番の足輪が付けられ放鳥されました。この個体はその後鶴居の鶴見台給餌場に飛来して、今年の3月まで見られています。今年はずがいがいいようですが、未だ繁殖に成功してはいない様子でした。この個体は雄と分かっていたから、今年はこの個体に発信器を取り付け放鳥しました。翌25日に捕獲したのは幼鳥で



目隠しもうひとつ！



ヤマブドウも干しブドウ状態です

したので、足輪だけ付けてすぐ親鳥に返しました。2週間後の11月7日に再出動して2羽を捕獲しました。この2羽は初めての捕獲個体でしたから、2羽ともに足輪を付け採血もしてから、発信器を取り付け放鳥しました。こうして今年は3羽に発信器を付け、4羽には新たに足輪を付けることができたので、大成功と意気揚々と引き上げてきました。でも後から発信器を取り付けた2羽は11月22日を最後に信号が受信されなくなったとのことで心配しています。何があったのでしょうか。最初に発信器を付けた個体はその後、サロベツを離れてオホーツク海側に出て枝幸を通り、ゆっくり南下しているようです。この個体は昨年、鶴居で越冬していますから、今年も鶴居に飛来するのでしょうか。昨年発信器を付けて放された個体は春になりサロベツ湿原に帰って行ったのですが、その後発信器からの信号が途絶えてしまったとのこと。発信器が落ちてしまったようです。発信器はしっかり付いていて欲しいのですが、一方で絶対取れないと言うのではタンチョウの負担が大きすぎるでしょうし、簡単に取れてしまうようでは意味がないし、と難しいものです。2～3年は付いていて欲しいのですがね。発信器を背負わせる紐の素材やこれを止める金具の素材など、もう少し工夫が必要なようです。こう言うことは何度もやって徐々に良くなっていくのでしょうか。道内の動物園がもう少し、道内に住む野生動物の保護に積極的になり、野生動物の保定の仕方などの講習を行い、野生動物を取り扱うことができる人を増やしてくれると良いのですがね。

こうしている間にもう12月、ここ釧路では初雪はあったと言いますが、私はまだ雪を見ていません。この時期は乾燥してカラカラ晴天が多いのが釧路の特徴です。ヤマブドウがカラカラに乾いてぶら下がっているのが見えました。なぜ鳥が食べなかったのでしょうか。あまり美味



エゾフクロウかと思いました

しくないブドウだったのですかね。先日チカ釣りにでもと思い、走っていると、道路わきの木の枝にエゾフクロウか？と思う灰色の塊が。ネズミを狙っているのか？日中見晴らしの良い枝に止まっていたのはカラスのモビングに会わないはずはないし。何か別物？などと思いながらしばらく走った後、確認に戻ってみることに。引き返しても見つかりません。Uターンして今来た道を。すると見えました。先ほどと同じ格好で。これは生きている動物でない証拠です。それでも写真を撮り、拡大して見ました。どうやらスズメバチの仲間の巣のようです。何度も通っていても気づかないものなのですね。木の葉が落ちると今まで見えなかったものが見えてくるようです。この時期に目立つのはツルウメモドキの黄色い実です。黄色い殻が割れて中から橙色の実が顔を出しているのです。これも鳥たちの良い餌になるのでしょうか。ノリウツギの枯れた装飾花は冬の初めのうらぶれた感じが強く、私はこの感じも好きな景色です。



ツルウメモドキの実



ノリウツギの装飾花

先週（11月27日）は根室管内北部のタンチョウを見に行きましたので、今週（12月4日）には釧路管内東部のタンチョウの様子を見に行ってみました。国道を直別まで行き、ここからは東に向かって農道を行います。キナシベツで2ペア、尺別では18羽のタンチョウを見ましたが、足輪付きは見あたりません。音別では例年多数のタンチョウが見られるのですがこの日はあまりいないようです。それでも123番と131番のペアがヒナ1羽を連れて見えました。ここから和天別を越え茶路に抜けたのですが、道路脇の牧草地に1羽のタンチョウが。オヤ？足が短いぞ！？蹠を曲げて下腿骨で立っているにしても短い！おかしいな。と思いながら鳥に一番近い所で車を止め、降りてみましたが、立つ様子はなく、衰弱きっているように見えました。私が遠目で見た感じでは両足共に骨折しているように思いました。鳥インフルエンザがタンチョウに感染しているのが確認されたのが音別ですから、無防備の私が近づくわけにはいきませんので、タンチョウ保護研究グループに電話を入れ、環境省につないでもらいました。夕方になり電話があって、



両足が骨折していると思われるタンチョウ

この個体の収容のため、猛禽類医学研究所のメンバーが出向いたが発見できなかったとのこと。出動した皆さんにはご苦労をおかけしました。私にはもう飛びあがる余力はないと見えたのですが、最後の力を振り絞ってどこかに飛んだのか、それともキツネにでも持って行かれたのか、不明のままです。この時の写真を載せてみました。一見して異常な個体だと判りますか？もしあなたが判らなければあなたは幸せ者です。判ってしまうと、また胸が痛みますね。そして何もできない自分に無力感だけが残りました。

